

出雲平野における弥生文化の成立過程

弥生Ⅰ期突帯文系土器がもたらした農耕民化

The Formation of the Yayoi Culture in Izumo Plain

藤尾慎一郎

はじめに

① 蔵小路西遺跡の突帯文系土器

② 出雲平野の突帯文・突帯文系土器編年

③ 西日本の突帯文系土器

④ 出雲平野における弥生文化成立期の諸問題

⑤ 結語

おわりに

【論文要旨】

西日本の弥生早期は突帯文系土器、Ⅰ期は板付・遠賀川系土器を標識土器としている。突帯文系土器は、Ⅰ期以降も突帯文系土器として一部の地域で使われ続けるが、出雲ではどのようなあり方を示すのかこれまであまり知られていなかった。今回、出雲市蔵小路西遺跡で見つかった突帯文系土器は遠賀川系土器と伴出ししないなど、この問題を考えるうえで貴重な材料を提供することとなった。そこで遺跡から出土する突帯文系土器と遠賀川系土器との出方を手がかりに、この地の弥生文化がどのようにして成立したかという問題について考察した。

出雲の突帯文系土器には、在来の早期突帯文系土器に系譜をもつ在来系、早期突帯文系土器が遠賀川系土器の影響を受けて成立した変容系、瀬戸内や豊後との関係が強い外来系が認められた。そこで遺跡ごとに三者の保有状況を調べたところ、水稻農耕を中心とする生活への転換過程と深い関係にあることがわかった。

すべての突帯文系土器と遠賀川系土器が出土し、縄文時代から数千年にわたって存続し、縄文以来の本拠地で弥生Ⅰ期前葉（板付Ⅰ新式期）に稲作を中心とする生活（弥生化）に転換するタテチヨウ遺跡や西川津遺跡。変容系を除く突帯文系土器と遠賀川系土器が出土し、縄文以来の本拠地がある同じ領域内で弥生Ⅰ期後半に弥生化する北講武氏元遺跡。在来系だけが出土し、弥生化することなく集落が廃絶する蔵小路西遺跡に代表される。

縄文以来の本拠地に占地したまま弥生化する例は今のところ出雲だけでみることができる。福岡県板付、岡山県津島南池、高知県田村遺跡はいずれも、それまで在来の人びとが本拠地としていなかった場所に出現するからである。したがってタテチヨウや西川津の弥生化は、弥生文化が伝播した地域において縄文以来の中核となる集団がもっとも早く、急速に転換した好例と考えられる。